

「死者も年寄りもないがしろにしない国モロッコと 日本の失われた豊かさ —第2次モロッコ・ボランティア 報告—」 2024年2月17日～24日

「カヨ子基金」代表 佐々木 美和
(社)神戸国際支縁機構代表 岩村 義雄

主題聖句：箴言 16:31 「白髪は誉れある冠 正義を行う道に見いだされる。」（『聖書協会
共同訳』）

| | |
|-----------------------------------------------------------------------------------|---|
| 目次「死者も年寄りもないがしろにしない国モロッコと 日本の失われた豊かさ —第2 次モロッコ・ボランティア 報告—」 2024年2月17日～24日..... | 1 |
| 1 コウノトリ飛び交う国..... | 1 |
| 2 倫理的行動と法との間の制限を乗り越え傷を包む..... | 2 |
| 3 おひとり暮らしの生き方，ベルベル人に学ぼう..... | 4 |
| 4 アスニ自治共同体議長との会談..... | 7 |
| 5 死者も年寄りもないがしろにしない国..... | 8 |
| 結論..... | 9 |

1 コウノトリ飛び交う国



写真 1: 日本では 1971 年に野生絶滅。モロッコにはコウノトリがいたるところで巣づくり
(2024年2月21日, アスニ・モスク)

2024年2月17日～24日、第2次¹モロッコ・ボランティアに向かいました。孤児の家「カヨ子²・チルドレン・ホーム」建設の準備を進めるためです。

空港から出ると、すぐにラシッドさんが迎えに来てくださいました。連絡していた予定時刻より遅れていたにもかかわらず、ラシッドさんは約束の時間より早めに到着し忍耐強く待ってくださっていました。筆者らの出合ってきたベルベル人のかたはみな、時間に正確です。むしろ忍耐強く親切で待たされても小言を言わないラシッドさんに接していると、ステレオタイプの「日本人」が誇る時間に正確という日本人像よりもベルベルの方が几帳面かもしれないと確信を持つようになりました。ベルベル人は、日本でいうところの義務教育をたとえ終了されていなくとも、資格がなくとも、独学で言語をマスターしたり、幼いころから何か国語も使いこなしたりするような語学力の優秀さがあります。

ラシッドさんの運転でアルハウズ州のラスニヤ村に到着しました。前回同様、「カヨ子基金」のロゴマークでもあるコウノトリをモスクの尖塔などで目にすることができました（写真1）。モロッコのいたるところで見かけるコウノトリ、日本ではまだまだの観があります。自然生態のチャンピョンのコウノトリがのびのびと育つモロッコは、技術を偏重し生産高にこだわり消費の安全性を無視して農薬などを用いてきた日本と異なります。豊かな自然を取り戻す先駆者の国であると刺激を受けます。

モロッコにあって日本が喪失したものはなにか、後述させていただきます。

2 倫理的行動と法との間の制限を乗り越え傷を包む

2023年9月8日、モロッコ国マラケシュの山岳地帯を襲ったマグニチュード6.8の地震で、3000人以上が命を落としました。11月、第1次ボランティアに訪れ、孤児たちの世話をするハビバさんと出合いました。3ヵ月を経て、ハビバさん、ご家族たちを再び訪問することができました。アラブ人から受ける力強さ、商人にみられるようなしたたかさの印象と異なり、ベルベル人は非常に純情、誠実、柔和な人柄が特長です。

第1次モロッコ・ボランティアで寝泊まりする場所でお出合いした看護師ハジャールさん(23歳)が、みずからすすんでボランティアに同行してくださいました。日本ではいま、<ボランティア>、<活動>は本来の在り方からほど遠い存在になっています³。翻ってモロッコには、ハジャールさんが自発的に、率先して仕事を調整して加わってくださったように、他者、とりわけ被災者に対する気づかいは旺盛と言えます。

神戸国際支縁機構の第2次石川・能登ボランティア(2024年1月14日～17日)に同行してくださったメンバーに、普段着で炊き出し作業もいとわず参加くださった医療従事者ら3人

¹ 第1次モロッコ・ボランティアは記事を参照。『神戸新聞』(2023年12月30日付)。

² 「カヨ子基金」および孤児の家「カヨ子・チルドレン・ホーム」の名は、阪神淡路大震災を経験され、2016年に神戸市で息を引き取った岩村カヨ子さんの名前から取っています。子どもに恵まれなかったカヨ子さんは、海外の被災地で生きる孤児のことを気かけ、故人の残した財産を基金として2017年から活動が始まりました。

³ 2024年1月1日、マグニチュード6.8と記録された地震を経験した能登半島では、2か月以上経っても水もトイレもままならないどころか、1か月間のボランティアさえ3000人にも満たない状況について、「ボランティア文化に陰り」と現代日本全体に警鐘を鳴らす記事を参照。『神戸新聞』(2024年2月19日付)。日本では活動としてのボランティア、あるいは<新たなはじまり>new beginning (アーレントを参考)となる自由が失われている。ボランティア、活動=はたらきについては本機構の第3次能登ボランティア(2024年2月4日～8日)報告

「奥能登の風光 取り戻せ」4頁を参照。活動(act)、<新たなはじまり> new beginning についてはArendt,Hannahによる“Human Condition”(1958=1998(2nd ed.)). Chicago&London: The University of Chicago Press, 17頁などを参照。現代日本社会の問題である、「心の復興」がなおざりにされるボランティアの経緯は前掲報告「奥能登の風光」の註9を参照。

がおられました。同様に、白衣ではなく庶民にも親しみやすい普段着でハジャーさんは同行してくださいました。治療用の薬、衛生用具などを段ボール箱にぎっしりつめて持参くださいました。第1次モロッコ・ボランティアでお出会った、息子をなくしたばかりの独身女性ハビバさんのご家族には、負傷なされた方もおられるので、その救急薬品などをお持ちくださいました(写真2)。モロッコも、日本と同様に医療従事者は倫理的行動と法との間に制限されていることもあります。しかし、ハジャーさんは困っている人たちへのケア、キユアを第一に行動なさる使命感にあふれておられました。治療を受けることができない人々のためならどんなに条件が悪くても、時間、体力、金銭を献げるスピリットをお持ちでした。今、日本と世界で必要とされている行動です。

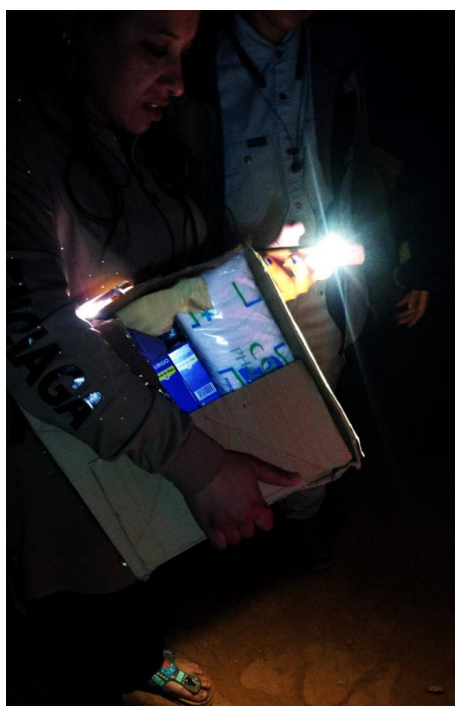


写真 2: ハジャーさんからの医療品を受け取るハビバさん
(2024年2月20日, イルブール)

ウィルガーヌ地方のイルブール村でハビバさん、ハビバさんの親戚であるハムザさんやそのほかの兄弟姉妹と再会しました(写真3)。母親を突然失ったハムザさんは大学をやめたばかりでした。地震があつて2か月ほどのころは、夜も眠れないほど、なくなった家族を思い悼んでいました。再会した際も、ほほえみながらも表情には隠せない陰影の表情がときおりおありでした。ボランティアは、心の復興に留意し、インフラなど外観の復旧より敏感であろうとします。復興とは、新たな縁づくりです。日本はなぜ孤独死の問題がそれほどとりあげられないのか、海外の被災地と比較すると教えられることがあります。災害は家族との親密な関係も切り裂かれます。日本の「お金がすべて」という拝金主義と効率主義の横行する競争社会になじめない人たちは、もはや日本社会に溶け込めないのです。いわゆる落ちこぼれとして息がしづらくなっています。

ハムザさんの妹ノールさん(アラビア語で光という意味)も倒壊の被災者です。東日本大震災を経験した宮城県石巻市の木村勝&ふさ子様ご夫妻は残された人生を地域の人たちに喜んでいただこうと小さな手作りの作品を作ってこられました。軽くてふわふわのフクロウ

のぬいぐるみです。手のひらサイズに収まるフクロウをノールさんにそっと手渡しました。ノールさんの目が大きくなり、ぬいぐるみに釘付けになりました。手作りで心のこもったフクロウの価値は、すぐにノールさんに伝わったことがノールさんの表情からわかりました。ノールさんは手でフクロウを包むと、かげがえのない宝物であるかのように喜んでおられました。なくさないようにと、すぐに自分の部屋のたいせつな場所にフクロウを仕舞いに行きました。

前回の報告でも報告させていただきました家の倒壊で負傷なさり、松葉杖をついておられたアブデルカビールさんは、杖とギブスにたよらなくてすむように回復されておられました。もっとも健常者のように活発に働くことができる状態にもどるには少しの時間がかかりそうでした。



写真 3:ハビバさん家族と筆者佐々木 右端 ハジャーラ看護師
(2024年2月20日、イルブール)

3 おひとり暮らしの生き方，ベルベル人に学ぼう

翌日から，今回は新たにタラタ地区イジュガックを訪問しました(写真4)。地震で45人近くの犠牲がありました。近隣と比べてもイジュカックは最も多くの死者が出た地域です。



写真 4: イジュカックに並ぶ地震後の住居(2024年2月20日, イジュカック)

自分の身体以上に大きな柴を背負っているマフジュバさん(60)を見かけました(写真 5, 6)。被災地で辛酸をなめているのは、孤児だけではありません。独居の高齢者も息をするのがやっとです。見渡す限り、どの家も損壊していました。途中の露店で筆者から野菜などの買い出しの申し出にたいして、マフジュバさんは「受縁力」がおありでした。

マフジュバさんは山の上の方まで足を踏みしめながら、途中で何度も休憩をして登られます。お礼にお茶やアーモンド(アmendウ)を振る舞っていただきました(写真 6)。



写真 5(左), 6(右): マフジュバ(60歳)(2024年2月20日, イジュカック)

マフジュバさんはアーモンドの硬い殻を割ってもてなしてくださいました。苦いのは咳に良いそうです。アフリカの地にボランティアで来たのを見張られ(シャケード), 共にあり導かれる御方を思わずにはられません(エレミヤ 1:11)。

ウイルガーヌの北に仮設テントが森の茂みにひしめきあっています。野外活動の独り用のテントに、アイーシャさん(60)⁴が住んでおられました(写真7)。



写真7: アイーシャ(60歳, 左)と岩村(右)。背後にあるアーモンドの花の開花は桜の花のようである(2024年2月20日, アムスギン)

仮設テントから道のない坂をよじ登ると地震で無残な姿に変わり果てた石造りのご自宅の家がありました。おひとり暮らしで生きてこられたとはいえ、ひっそりと過ごしておられるものではありません。そこアムスギン村の古参の長老格のように人々から慕われておられたのには驚きました。年長者をたいせつにする風土なのです。あそこの家には〇〇さんが住んでいたが命を落としたからお気の毒だとか、みんなで助け合っていこうと被災した村人たちを励ます姿は、圧倒されました。さしずめ日本ならば、年を重ねると若い人たちの足手まといになると目立たないようになさる傾向があります。しかし、モロッコでは人生経験、郷土について物知りであるゆえか、尊厳があります。

地震で両足を失ったファトマさん(60)も独居です(写真8)。全壊した家を見せてもらいました。杖をついて、歩かれ、日本からボランティアに来ていると聞き、テントから出てきてあいさつをされました。お顔だけを拝見していると地震で夫、両足、家を一度に失った不幸をみじんも感じさせない風貌に威厳がおりていました。

⁴ イジュカックやアムスギンでは、ご高齢のかたはみな一様に「60歳」と述べる。



写真 8: 写真中央に両足を失ったファトマさん(60 歳)(2024 年 2 月 21 日, アムスギン)

4 アスニ自治共同体議長との会談

「カヨコ・チルドレン・ホーム」を 5 年契約で建てることに積極的に推し進めるアスニ地区(4 千人)を治めるジャマル・イメルハン(43 歳)と佐々木美和代表は固い握手をしました。



写真 9: ジャマル・イメルハン(43)と筆者 アスニ自治体 長官室 2024 年 2 月 21 日

5 死者も年寄りもないがしろにしない国

このたびの第2次モロッコ・ボランティアで全日程参加くださったハジャールさんは同年齢の親友レイラさんを地震でなくしました。それでもハジャールさんは悲しみに暮れるどころか、むしろ利他的だった親友の死を無駄にしたくないと、「今日が最期の日のように生きたい」「レイラとしていたボランティア活動をしたい」と私たちの小さなはたらきに参加くださいました。急峻な斜面をもものともせず、どこにでも駆けつけようとする姿勢にボランティア魂を觀ました。

親友のレイラさんの生前、レイラさんとともにボランティアを行っていたハジャールさんは、利他的だったレイラさんとレイラさんのご遺族のために、自分のできるどんな人助けでもしたいと述べておられます (I love to help people. Before my friend Leila died, we always loved to do volunteer work that's why after she died I always want to do anything I can do for her.)。

レイラさんの死後も、ハジャールさんは、レイラさんの利他性を忘れることなく、もはや地上では語らうことができなくても、いつも傍らにレイラさんがおられると意識しておられるようです。ハジャールさんに、「もし孤児がいれば、孤児の面倒を見ることはできますか」と尋ねました。彼女は「孤児と一緒に住むこと、孤児を引き取ることは、私にとってはなんの問題もない (I have no problem)」と述べました。そんな精神態度は、地上では語らうことができなくてもいつも傍らにレイラさんがおられると意識しておられるようです。筆者らの滞在中、みずからすすんで孤児たち、独居の高齢者のかたがたのもとへ、ともに訪問させていただきました。その利他性を言葉だけでなく、行動で表してくださいました。地震で傷ついた人たちに身を低くして、微笑みをたやさず接する態度は現代のナイチンゲールを思わせられました。ハジャールさんとも短期間で家族になり、かけがえのない友情が生まれました。

彼女は地震中、2度赤子を取り上げました。日本と同様、モロッコでも、災害などの緊急時に、医療行為をすることは容認されていません。しかし、いのちの危険が迫っている場合、超法規的手段を講じざるを得ないケースもあります。とりわけ医療機関もない山岳地帯において出産などの緊急性が生じている場合、躊躇せず、母子の救命措置をとらざるを得ない判断を迫られるとします。ちょうど高速道路を制限速度を守らず、現場に急行する救急車のように、「いのち」が関係するために、法律を越えてでも進退をかけてむずかしい判断をせざるを得ないこともあります。なぜなら、いのちの責任を問われるからです。ハジャールさんは法律上のリスクなど自分に降りかかる可能性のある様々なリスクを承知しながらなお、最も小さくされたいのちに寄り添い、取り上げる決断と経験をしました。日本で、いや世界で、ハジャールさんと同様に行動できるひとは、どれほどいるのでしょうか。

ハジャールさんの父親のモハメドさんも、孤児の家建設について重要なことだと述べてくださいました (2024年2月22日)。まだ地震による損壊の家も修繕の目途が立っていないなかにながら、モハメドさんも、孤児に対するあわれみに欠くことはありません。

筆者が帰国する日の別れ際、「一緒に孤児のためになにかしましょう」とハジャールさんと抱擁し合い、別れました。筆者らの帰国後にも「このボランティアのはたらきにもともにかかわることができて、うれしい。孤児のために家を建てることを完成させましょう」と連絡をくださっています。

今日もハジャーさんは、レイラさんのことを考えない日はありません。モロッコでは金曜日は墓前に訪れ死者のことを覚える日です。筆者らが日本に帰国してから、金曜日にハジャーさんに連絡すると、その日はちょうどレイラさんの故郷、ティズニット Tiznit のお墓に彼女の兄弟が訪れていることを返信してくれました。

結論

死者もお年寄りもないがしろにしない国モロッコ王国には、生きとし生ける物に対する隣人愛が息づいています。効率,能率,便利さを追い求め、他者に対する思いやりが希薄になっている日本にない温かさがあります。自分自身の人生を豊かに生きつつ、他の人への感情移入を失わないモロッコの地で、日本人の善意によって「カヨコ・チルドレン・ホーム」が建つように現地のひとびと、行政、メディアは関心をもっておられます。ハジャーさんも、孤児の家の建設を最後までやり遂げたいと連絡をくださっています。自分自身へのリスクを省みず、みずから被害に遭いながらも、復興の過程で他者を思いやっていますモロッコのひとたちと孤児の世話をするため、日本の皆さまのご協力、博愛の精神、ご支縁を神戸、否、全国からお伝えしたいとお祈りしています。